

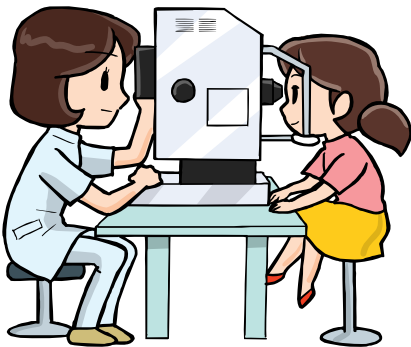


目次 ◆ 診療科紹介(眼科)
◆ 医師のご紹介

◆ 小児科でよく診る病気とまれな病気

診療科紹介【眼科】

眼科部長 檀上 幸孝



情報の約80%は目から入るとされています。クオリティ・オブ・ライフ（QOL）はクオリティ・オブ・ビジョン（QOV）によって支えられているとも言えます。高齢社会を迎え、クオリティ・オブ・ライフの維持が重要になってきていますが、一方最近の眼の病気の動向は白内障、緑内障、加齢黄斑変性症などクオリティ・オブ・ビジョンに影響するものが激増してきております。しかも、高齢者の場合、例えば白内障と加齢黄斑変性症の2つの眼の病気を合併するというように、単一の病気だけでなく2つ3つの眼の病気を合併していることが多いのです。

近年勤務医不足によって、複数の眼の病気を治療できる眼科が減少してきています。当科でもご多分にもれず欠員を生じて久しいですが、多様な眼の病気に対応できるように常に新しい技術の導入に力を入れて人手不足をハード面で補っています。

最近のトピックスとしましては、①涙道内視鏡、②小切開硝子体手術があります。すべてのかたに適応になるとは限りませんが、担当医にご相談ください。

【涙道内視鏡】

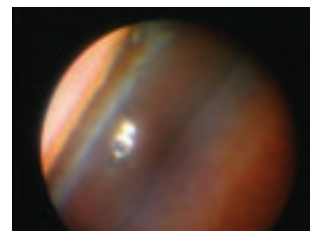
流涙症の原因となる涙道閉塞症の治療で使用します。閉塞部位を内視鏡下で確認して穴を開けてシリコン製のチューブを留置します。内視鏡を使用することによって閉塞部を直視下に穿孔できるので治療成績が良くなります。また下にご紹介する硝子体手術にも内視鏡を使用することがあります。

【小切開硝子体手術】

硝子体手術は網膜剥離や糖尿病網膜症などに対して行う手術です。1mm径程度の穴から器具を入れて行います。より小切開で行うことで、手術時間を短縮でき、術後炎症を軽減することができます。



涙道内視鏡でみた閉塞部を開放直後の涙道



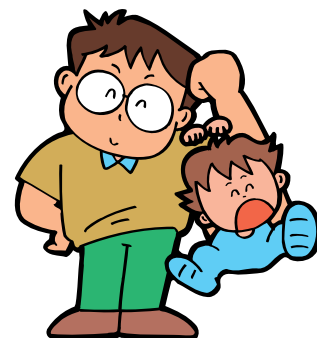
虹彩の裏を内視鏡で見たところ
(虹彩の裏は通常見ることはできません)

小児科でよく診る病気とまれな病気 ～ その新しい治療法 ～

小児科部長 赤木 幹弘

1. 日常経験する小児科疾患の概要

私たちは生まれてしばらくの間、あかちゃんのころはお母さんからもらった抗体が残っておりそんなに病気をしませんが、1歳前後から3歳頃までは一転して病気がちとなり発熱や咳、嘔吐や下痢で小児科の外来を頻繁に受診することになります。治りが早いのも小児の特徴ですが、いったんこじらせて重症化すると今度は進行が早いため油断できません。



当科のような中小規模病院の外来で多いのは呼吸器や消化管の感染症です。しかし、白血病や脳腫瘍、てんかんや神経代謝疾患などまれな病気にも実はよく出会います。そのため小児科医はあらゆる小児の病気を考えに入れて診療しないとイケません。救急を要するか、高次の医療機関への紹介が必要かどうかはたいていその場で決めます。たとえば、入院の必要となる0歳3ヵ月未満の発熱はすぐ入院（転院）を必要とします。小児の悪性腫瘍や小児外科の対象となるような病気と診断すれば対応のできる施設を紹介します。

当科での入院症例は肺炎、胸膜炎や気管支喘息などの呼吸器疾患、カンピロバクター腸炎、サルモネラ腸炎やロタウイルス腸炎などの消化管感染症、尿路感染症や急性腎炎などの腎泌尿器科疾患、熱性痙攣や無菌性髄膜炎などの中枢神経疾患と特発性血小板減少性紫斑病の血液・造血器疾患や敗血症などですが、入院でも大部分は感染症です。そのため当科での小児科入院は原則個室隔離で対応しています。



小児科で入院の対象となるのは、3ヵ月未満の発熱の他、5日以上続く発熱、外来点滴で軽快しない脱水症、吸入／点滴で軽快しない喘息発作、止痙できない痙攣発作などがおもなところですが。入院して治療を行い経過を慎重にみる必要があります。

よくみる病気を症状から列記してみますと、まず発熱については年齢によっても傾向が違い、随伴症状（痙攣、喘息発作、腹痛など）によっても全く異り、さまざまに列記するだけでも簡単ではありませんがその他についてはおおまかには以下のようにまとめられます。

いずれも最初に問診で1) 発病時期、2) 家族歴（同胞）、3) 基礎疾患（出生時を含めて）、4) 既往歴を参考にします。

1. **咳（呼吸困難）** 気管支喘息、喘息性気管支炎、仮性クループ、肺炎、百日咳
2. **腹痛** 急性腸炎（サルモネラ、キャンピロバクター、0157、ロタウイルス）、腸重積、虫垂炎、アレルギー性紫斑病、イレウス
3. **嘔吐** 急性腸炎、髄膜炎、周期性嘔吐症、肥厚性幽門狭窄
4. **発疹** 水痘、溶連菌感染症、伝染性紅斑、突発性発疹症、虫さされ、食物アレルギー、蕁麻疹、川崎病、薬疹（麻疹、風疹に伴う発疹はワクチンの普及で現在ではまれになりました）
5. **痙攣** 熱性痙攣、髄膜炎、脳炎・脳症、てんかん

仮性クループは犬の吠えるような咳（犬吠様咳嗽）を特徴とします。呼吸困難を急速のおこすおそれがありすぐに入院の対象です。肺炎で最近際立って多いのがマイコプラズマ肺炎です。10歳前後が重症化します。典型例は高熱です。咳は最初はそれほどでもありません。

腹痛は内科系疾患か外科系疾患か、あるいは婦人科系か。下痢の有無、血便の有無が発熱の有無が病気を見分けるポイントとなります。アレルギー性紫斑病では最初は紫斑がなく腹痛で始まる場合も多いのです。

嘔吐は咳に伴うものか、腹痛に伴うものか、中枢性かで病気が違ってきます。

痙攣は経過時間、発作前後の意識障害の有無、発作型、左右差対称性、発熱の有無で病気を鑑別診断します。よくみられる熱性痙攣は乳幼児で発熱時におこりますが痙攣の前後で意識障害はなく、ときにみられる一時的な麻痺を除けば後遺症を残しません。初発は突発性発疹症に伴うことが多く、家族に熱性痙攣を過去におこしたひとがあることが多いです。



2. 新しい治療法について

新しい治療薬としてインフルエンザで吸入薬、点滴抗ウイルス剤が追加され選択肢がふえました。大人では難治性の感染症に一般的であったニューキノロンも小児で使えるようになりました。新薬が10年に一度だった抗てんかん薬も最近になりふえてきました。小児科医は新薬に対して保守的になりがちです。副作用を嫌がる耐性菌を嫌がるというより、こどもの復元力はおおきいので経過をしっかりと診ていけば評価の定まらない新薬に頼らなくてもよい、という気持ちがどこかにあるからかもしれません。





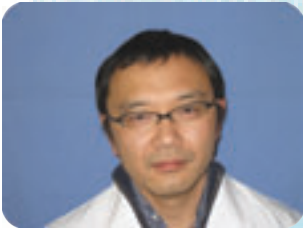
医師の ご紹介

- ① 専門分野 ② 趣味 ③ 一言



五福 淳二 部長（外科）

- ① 消化器外科
- ② スキー、スノーボード、ウィンドサーフィン、ダイビング、ゴルフ、トレッキングetc.
- ③ 前任地（市立貝塚病院）では主に上部消化管（食道、胃）を担当しておりましたが、当院では消化器全般の手術、化学療法を他の外科のスタッフと協力しながら行ってまいりたいと思っております。特に胸腔鏡や腹腔鏡を用いた低侵襲な手術につきましても積極的に行ってゆく予定ですので、よろしくお願い致します。



谷口 仁章 部長（外科）

- ① 消化器外科
- ② スキー、野球
- ③ 4月よりお世話になっております。3月までは兵庫県立西宮病院にて、

主に上部消化管疾患を担当しておりました。当院では消化器全般を診させていただきます。今回当院にても内視鏡を用いた低侵襲手術を導入していく予定です。



竹林 宏記 医長 （耳鼻咽喉科）

- ① 耳鼻咽喉科
- ② テニス、音楽鑑賞
- ③ 平成13年に兵庫医科大学を卒業し、同学耳鼻咽喉科教室に入局致しました。2年間の研修のあと大阪厚生年金病院に2年間出向し、その後大学に戻り鼻・副鼻腔チームで7年間働かせていただきました。昨年より再度大阪厚生年金病院で勤務しておりました。専門分野は鼻・副鼻腔疾患と嗅覚です。船員保険病院では、内視鏡を使用した蓄膿（慢性副鼻腔炎）の手術（内視鏡下鼻内手術）やアレルギー性鼻炎の手術を含む鼻全般の手術を行っていきたく考えています。宜しくお願い致します。



前田 英美 医員 （耳鼻咽喉科）

- ① 耳鼻咽喉科
- ② ピアノ、野球観戦
- ③ 4月より耳鼻咽喉科に赴任して参りました。

耳鼻咽喉科は約2年間閉鎖されていたとのことで、この度開設の一員として迎えていただき、大変光栄に思っております。竹林先生ともども耳鼻咽喉科を盛り上げていきたいと思っておりますので、今後とも宜しくお願いいたします。



大城 良太 医員（外科）

- ① 外科
- ② 読書
- ③ 平成24年4月1日付で大阪船員保険病院 外科に赴任してきました。前年までは大阪大学消化器外科にて研究活動をしていました。今後は外科医として頑張っていきますので、どうぞ宜しくお願いします。



岡村 玲子 医員 （形成外科）

- ① 形成外科
- ② 散歩、写真
- ③ 4月から勤務させていただいております。当院

は形成外科の人数が多く、積極的に診療を行っております。形成外科としてはまだまだ未熟な私ですので、恵まれた環境に來られたと喜んでおります。また、近くには散歩するにはちょうどよい大阪港があり、これまた恵まれてると喜んでおります。頑張ります、よろしくお願い致します。

